

『法華経』における説法について

邊 見 光 真

一、はじめに

我々は、経や論および弘法大師の著作などを学んできた。しかし、どこかで、それらに対して一種の傍觀者的なスタンスがあるのでないだろうか。それは、喩えば、絵を描く人と絵を見る人との違いのようなものである。インド、中国、日本など場所的にも文化的にも異なる中で、過去の祖師たちは自己の仏教という絵を描いてきたのではなかったのか。

しかし、現代において、過去の祖師たちと同じ道を歩むことは、ほとんど不可能になったといえるのではなかろうか。現代では文化状況が大きく違うし、まずは家族を養わなければならないという今日的情況があるからである。この意味では、在家的にしかな生きていけないのである。

また、現代では、弘法大師の描いた絵をながめていれば十分に生きていけるということもある。それは、弘法大師の絵が多元性を持っていることによるのかも知れない。しかし、ここで「弘法大師の絵がすばらしい」といって、眺

めている（あるいは、すばらしさを聞いている）だけでよいのかという自己に関する問題がある。

つまり、僧侶というのは本来は絵描きだったのが、いつのまにか鑑賞するだけの人になってしまったのである。現代においては、絵描きであることは難しい。しかし、現代に合った絵描き（それは絵描きとはいえないようなものかも知れないが）を模索しようという気持は必要なのではないだろうか。

ここで問題としている自己の仏教を描くこととは、仏教の全体を自己に引受け自己の中で確信する在り方として考えるものである。そして、その一端を、『法華経』における説法を取上げてみようとしてみるものである。

二、仏陀との出逢い

釈尊が生存していたとき、釈尊の偉大さは弟子たちの間に浸透していたに違いない。例えば、それは釈尊の説いた法に関するシャーリプトラと火種外道との対話の中に窺うことができる（『雑阿含』巻35、大正2、pp. 251c-252a）。そこでは、シャーリプトラは火種外道に対して、「我は師の乳を離れず」という。これは、シャーリプトラがいまだ師について教えを聞くことを、火種外道が擲擻して乳離れしていないといったのに対する答である。シャーリプトラにとって、釈尊の説く法は、「正法律にして、出離・正覚の道」であり、「讚歎されるべき、依止されるべき」ものであった。外道の牝牛（師）のように乳汁の少ない、すぐに小牛が乳を離れるような牝牛（師）ではなかったのである。

釈尊の弟子たちは法を媒介として悟りへと至るのであるが、そこでは法を説く釈尊をこそ拠としていたと考えられる。そして、それは釈尊が悟りの体現者（輪廻からの解脱者）だからである。この意味において、弟子たちの悟りへの在り方は、釈尊が無師独悟であったのとは大きく異なっている。

弟子にとっては、悟りと一体化している釈尊から流れ出た言葉によって示される教えであるからこそ、そして悟りへと導くものであるから、自己を釈尊が説いた道へ投げ入れることができるのである。これについては、『聖求経』において、初転法輪のときの五比丘の達した境地から窺うことができる。

まず、五比丘にむかって自分が何者であり、何を目的として、何をしようとしているのかを次のようにいう。

比丘達、如来は応供者、正等覚者なり。比丘達、耳を用意せよ、不死の法は得られたり、予は教へん、予は法を説かん、汝達教へられたる如く、その如く行せば、久しからずして、善男子が在家より出家行者となれる、かの目的たる、無上梵行の完成を、現法中に、みずから知り、證し、達して住するを得るに至らん。

そして、五比丘を教化し終って、次のようにいう。

是に五比丘は予に従りて是の如く説かれ、是の如く教へられて、みずから生法にして生法に於いて患を見、無生無上安穩涅槃を求めて、無生無上安穩涅槃を得たり、みずから老法して……無老無上安穩涅槃を得たり、みずから病法にして……無病無上安穩涅槃を得たり、みずから死法にして……不死無上安穩涅槃を得たり、みずから愁法にして……無愁無上安穩涅槃を得たり、みずから雜穢法にして……無雜穢無上安穩涅槃を得たり、而して彼等に次の如き智見生ぜり、「我等の解脱は不動なり、是、最後の生なり、今や更に復存在あることなし」と。

〔聖求経〕、南伝大蔵経卷9、pp. 309-310) (……は筆者による中略)

ここに示されている五比丘の到達した境地は、釈尊が菩提樹下で到達した境地と同じである。釈尊の教えによって、釈尊の求めたニルヴァーナが、五比丘に開示されたのである。

では、五比丘は釈尊と同じになったのであろうか。初転法輪におけるこの時点では同じ悟りをみている。しかし、『大品』(南伝大蔵経卷3、pp. 72-73)によれば、シャーリプトラがアッサジ(五比丘の一人と考えられている)に

会って釈尊の説く法について聞いたとき、「我は幼稚にして、出家して日浅く、此法と律とに入りて新参なり。我、広く法を示すこと能はず、略して義を説くこと能はず」といって断るのである。その後、多少なりとも説けと請われ、簡単な偈（縁生偈といわれている）を説いている。釈尊と同じ悟りをみたはずのアッサジは、法を十分に説くことができなかったのである。少なくとも、説法の能力において、釈尊は弟子と大きく異なった力を持っていたのである。

ところで、言葉は言葉が発せられた状況において意義をもつ。例えば、五比丘が初転法輪のとき不死の法を得たように。弟子は、語る人と同一のコンテキストの中で正しく語られているものを理解していくのである。同じ言葉でも別のコンテキストの中で読まれるとき、形骸化されたものを読まざるを得ない。表面的な意味しか分からなくなっていく。しかも、釈尊の説法は対機説法であった。

そうすると、釈尊の入滅後、衆生にとって、法は悟りへと導く力を失うのであろうか。釈尊との出会い（釈尊の力を受け止めること）はないのだろうか。時代状況が変われば、基本的には力は感じられなくなっていくといえる。そこで、釈尊の力を感じようとすれば、新たなコンテキストの中で釈尊の説いた形骸化した法にいかん意義を見いだすかである。説法の背後にあったものを見いだしていくしかない。そして、その意義の発見こそが正法なのである。

これは、新しいコンテキストの中で釈尊に帰れという思想である。しかし、それは新たな問題として、釈尊その人にも何らかの解釈が加わってくることになる。単に歴史的な釈尊をみるのではなく、釈尊の背後にあるものを考えざるを得ないからである。それが、新しいコンテキストの中で「釈尊の説法を聞く」ことである。

三、『法華經』にとつての正法—多様性と統一性—

『法華經』はその経題 (sadharmapundarikāstra) から分るように、正法 (saddharma) とは何であるかという問題をとしている。そこには、当然『法華經』が考えている正法というものがある。ところで、『法華經』の成立は次第に増広されて行ったものであり、三段階に分けてその増広が考えられている。そこで、その文脈をみていく場合、『法華經』第二章「巧みな方便」が『法華經』成立の最初に位置するといわれており、この経の主張の基本的部分があると考えられる。したがって、この経の出現の動機もこの章を中心に見ていくことができるであろう。

この第二章で述べられている事柄は、周知の如く一乗思想である。ここでは、釈尊が、シャーリプトラを対告者として、如来の方便とはいかなるものであるかが明らかにされている。その一乗思想とは、如来がさまざまに法を説いたことの意義の表明であると考えられる。シャーリプトラは、この意義が得られず、如来の智見から見放されたと悩んでいたのである。シャーリプトラは、三度にわたって釈尊が如来の方便をほめる意味を問い、それを説くことを要請して、その意味を聞くことができ、完全な涅槃に入ったのである。シャーリプトラの意義の確立こそが、シャーリプトラ自らの仏教への自己の投げ入れである。なぜならば、そのときにシャーリプトラには今までの悩みは全くなくなったのであるから。

そこで、問題となるのは意義の確立の仕方である。それは、勝手な解釈を与えただけなのではないかという疑問が起る。解釈である以上、そこには解釈する側のフィルターがかかっているのは当然である。この意味で、解釈とは勝手なものなのである。しかし、解釈するときにはどのような意義を見いだしているのか、それが問題の中心である。それを抜きにしては、何のための解釈であるのか、解釈した人の精神に触れることはできないであろう。

第二章(あるいは『法華經』全体)のスタンスの独自性は、歴史的に発展していった仏教の全体の受け止め方にある。仏伝を下敷きにして、さまざまな法が説かれた意義をみることの表明なのである。第二章の文脈に沿いながら、

具体的にみていこう。

まず、釈尊は無量義処三昧から出て、シャーリプトラにつきのように語る。

シャーリプトラよ。尊敬されるべき、正等覚者である如来たちは、深遠で見難く知り難き仏智 (buddha-jñāna) を悟っているのであり、「仏智は」すべての声聞や独覚たちには理解し難いものである。それはなぜかといえ、実にシャーリプトラよ、尊敬されるべき、正等覚者である如来たちは、幾百千コーティ・ナユタの多くの仏に親近し、幾百千コーティ・ナユタの多くの仏のもので修行し、無上正等覚に向って長い間かかって近づき、精進して、希有にして未曾有なる法をそなえ、理解し難き法を知っているからである。シャーリプトラよ。尊敬されるべき、正等覚者である如来たちの密意の言葉 (samdhā-phasya) は理解し難い。それはなぜかといえは、「如来たちは」みづから実証せる諸法をいろいろな巧みな方便と智見 (jñāna-dharsana) とによって、「すなわち」原因、理由、例、根拠、語源的説明、施設によって、説くからである。「それは」それぞれの巧みな方便によって、それぞれに執着している人々を解脱させるためである。

(“Saddharma-pundarīka-sūtra” ケルン・南条本、p. 29, II. 2-9)

ここで問題となっていることは、如来の悟っている仏智の意味するものがいかなることかということである。この仏智は声聞や独覚の智と異っており、その違いの理由は多くの仏のもとでの修行によって希有にして、理解し難き法をそなえているという。つまり、仏智の意味するものは、如来によってこそ法(教え)が完全に説かれ得るということなのである。

如来が人々に法を説く場合、さまざまな執着を持っている人々をみて、その人々を適切な教えで導いて、涅槃へと至らせるといふのが、ここでの説法の在りようである。もちろん、長者窮子の喩にあるように、ある人が階段的に導

かれるという場合も含まれるであろう。そうした法は、必然的に方便としての法になってしまし、語られた言葉は密意のものとなってしまふ。もし、語れたものが完全に理解されるとしたら、如来のみが知り得るものである。それについて、第二章は次のようにいっている。

シャーリプトラよ。如来は法を知るといふその法を、如来こそが如来に説き得るのである。また、シャーリプトラよ、一切法を如来こそが説くのである。また、一切法とはどのような法であるのか、これらの法とはどのような法態か、これらの法とはどのような特徴か、これらの法とはどのような自性か、「すなわち」これらの法は何であるのか、どのような法であるか、どのような特徴か、どのような自性か、と。これらの法について、如来こそが知覚し、認知しているのである。

(Ibid., p. 30, 11. 2-6)

如来は法の全体をみているといふてよいであろう。如来が如来に語るといふことは、この法の全体性は如来のみが知り得るといふことなのである。

ここで問題となっている法が、『法華経』成立の動機となっていると当然考えられる。その集会にいたものたちすべてが抱いた疑問にその一端は窺われる。その疑問とは、次のようなものである。

世尊が大いに如来たちの巧みな方便を賞賛するのは、実にどのような理由、どのような原因があるのであろうか。「自分が悟ったこの法は深遠である」と賞賛し、また「一切の声聞、独覚たちには理解し難い」と賞賛する「のは、どのような理由、原因があるのであろうか」。世尊が「解脱は一つである」と言われた限りでは、我々もまた、諸仏の法を得、涅槃を得ているのである。世尊がこのようにいわれた意味が分らない。

(Ibid., p. 33, 11. 7-11)

自分たちが涅槃（煩惱の滅）を得たということは、釈尊の説いた法にしたがって目的を達成していることである。そ

の限りにおいて、さまざまな法は真実なるものである。しかし、ここでは、釈尊は、自ら悟った法は声聞、独覚には理解し難く深遠であるといい、そして如来の方便をはめるのである。

そうになると、自分たちの得た涅槃とは真実なるものであるのか、自分たちに示された法というものは何であるのかという、これまでの確信に混乱が生じる。今まで信じていたものが釈尊自身によって否定されようとしているのである。

そこで、シャーリプトラはこのように述べる意味を語ることを要請するのであるが、釈尊は「この意味が語られることが何になるのか。それはなぜかといえば、この神々や世間の人はおそれるであろうからである」と、不説法へ心が傾く。この場面が、仏伝における成道、梵天勸請、説法ということをベースに述べられていることは明らかである。つまり、ここで問題としている法は、釈尊が菩提樹下で悟ったものとして解釈されていることである。仏智を得るといふことは、如来のみが知り、語ることでできる法の獲得であり、それが涅槃（煩惱の滅）の獲得であるということになる。如来だけが法の全体をみているのである。

声聞が涅槃を得たとする確信は、一つの立場における確信に過ぎない。そして、立場というものは一つではないのである。『法華經』は、さまざまな立場、あるいは在り方を統一する立場を提示する。

シャーリプトラよ。如来の密意の言葉は知り難い。それはなぜかといえば、シャーリプトラよ、私はさまざまに語源的説明、解説、言説、例によって、さまざまな幾百千の巧みな方便によって法を説いたからである。シャーリプトラよ。正法は思考できず、思考の領域を超え、如来によって理解されるものである。それはなぜかといえ、シャーリプトラよ、尊敬されるべき正等覚者である如来は一つの仕事、一つの行為のために世間に現れるのである、「すなわち」偉大な仕事、偉大な行為のために。シャーリプトラよ。その仕事のために尊敬されるべき

正等覚者である如来は世間に現れるという如来の一つの仕事、一つの行為、偉大な仕事、偉大な行為とは何であろうか。すなわち、それは人々に如来の智見を得させしめるという理由によって、尊敬されるべき正等覚者である如来は世間に現れるのである。(中略) シャーリプトラよ。私は唯一の乗物について、すなわち仏乗を衆生に説くのである。シャーリプトラよ。何らかの第二、あるいは第三の乗物があるのではない。シャーリプトラよ。あらゆる十方世界において、このことが法性(dharmata)である。(Ibid, pp. 39-40, 11, 10-15)

菩提樹下で得た仏智とは、法のすべてが知られていることが内容であった。そして、それがさまざまに衆生に語られること、すなわち説法とは方便として在るものであった。ここで法性ということは、その多様な法は一乗を本質としていることを意味している。この法性は、説法されたさまざまな法の全体がどのよう在るのかという原理なのである。説法されたものに統一性を与えるものなのである。この統一性をもたらす原理が一乗なのである。そのことによって、説法されたものの全体を見渡すことができるのである。

第二章は、さらに過去の如来たちも、未来の如来たちも、現在の如来たちも、唯一の乗物について説いてきたのであるという。多くの方便として法が説かれるとき、一乗は原理として常住なのである。もちろん、その背後には悟りへ至らせる(如来に智見を得させる)という宗教性があることを忘れてはならないであろう。一乗の原理性と方便との関係は、第102、103偈によれば次のようである。

実にこの法の道理(dharma-neeti)は常に存続しているものであり、諸法の自性(prakriti)は常に輝いているものである。両足あるものの中の最高者である諸仏はこのことを知って、この一乗を説くであろう。[102]

法の存続性(dharma-sthiti)と法の確実性(dharma-niyamata)はこの世間において不動にして常に存続している。諸仏はこの悟りを地上の座において「悟って」巧みな方便を説くであろう。[103]

法の道理とは、これに先だつ一連の文脈から、「諸仏が多く、法門を説くことは一乗を説くことである」ということである。これは変ることのない法則なのである。それゆえに、世間において存続性と確実性を持ち得るのである。諸仏の悟りとは一乗の悟りであり、そして、それは差異化されて（方便として）教示されるものなのである。

人は、さまざまに差異化されたものを自覚しているが、それぞれの差異化されたものを貫く共通の原理が発見できないとき、混乱が生じる。多様性の中を生きる根拠が見いだせないのである。しかし、そこに共通の原理によって統一性が得られれば、差異化されたものは関係性を結ぶことができ、混乱は解消する。差異化されたものに意味を見いだしていけるのである（第二章では、六波羅蜜、忍辱、調禦、調伏、仏塔・仏像崇拜などがさまざまな法として説かれる）。そして、このことによって逆に全体を生きていけるのである。

法の差異化は衆生の性向にしたがって現れたもので、衆生の側に原因がある。如来は、ただ如来の智見を得させるために、衆生に対応して説くだけであり、同じ一つの仏乗の中にあるものなのである。ここでは、差異化されたものの関係性は、如来によって媒介された関係性であり、同じ場に属しているという関係性である。しかも、それは一切の衆生が如来になるための法（教え）の場を形成しているものなのである。

『法華経』は、この一乗を説いて、その場へ人を引入するのである。第三章の最初において、この説法を聞いたシャーリプトラの次のような言葉は正にその場に帰属した確信の表明である。

世尊よ。今日、私は涅槃を得ました。世尊よ。今日、私は完全な涅槃に入りました。世尊よ。今日、私は阿羅漢「の位」を得ました。世尊よ。今日、私は世尊の長男として、胸より生じたもの、口より生じたもの、法より生じたもの、法の化身、法の相続人、法から生じたものとなりました。

(Ibid., p. 61, II. 1-3)

これは、如来の弟子であることを表明する場合の定形句である。シャーリプトラは、一乗ということが理解できたからこそ、如来の弟子としてすべての法を受け止めることができたのである。これが正法であるとの確信を持っていたのである。

ここには、もう一つ涅槃と悟りの問題がある。シャーリプトラが得た涅槃とは、煩惱の滅という意味での涅槃である。そして、ここでは阿羅漢になったのであり、決して仏になったのではない。なぜならば、後に、世尊より授記され「赤蓮花の光明」(padma-praha) という名前の如来となると言われるからである。シャーリプトラには、この後一切法の獲得の長い道のりを歩むことになる。

では、ここでは何が起ったのであろうか。シャーリプトラは如来の智見の何たるかがみえたのである。それは、一種の悟りであり、涅槃ではある。しかし、『法華経』では如来の智見の獲得、一切知者となることこそを最高の悟りとみなしているのであって、真の悟りではない。また、第五章「菓草の喩え」では、涅槃は一つであり、その最終的な意味での「不死の涅槃は、一切の法が悟られることによって得られるのである」(Ibid, p. 140, 1. 10) という。如来は三界を離れてはいるが、慈悲心を生じて、三界においてきて衆生済度のために法を説くのである。そうすると、涅槃とは、如来の説法している在りようとなる。シャーリプトラの悟りは、弟子としての悟りである。一切智者として法を説くことはできないのである。この意味では、初転法輪における五比丘の悟りと同じ在り方である。

『法華経』は、このシャーリプトラの聞法を、第二の転法輪として位置づけるのである。一乗の法が説かれ、シャーリプトラが授記されると、神々は釈尊にマンダラーヴァ花を降らせるなどして、この説法を次のようにいう。

以前に、世尊はヴァーラーナシーのリシパタナという鹿園で法輪を転じましたが、今日再び、世尊はこの最高の第二の法輪を転じました。

(Ibid, p. 69, 11. 12-13)

ここでは、『法華經』が正法として一乗ということに意義を見いだしたことが、端的に釈尊の第二の転法輪として示されている。それは、釈尊との出会いであり、釈尊から流れ出る教えを受け止めることである。釈尊の力を受け止めたのである。

しかし、新しいコンテキストの中で、釈尊が過去のままの釈尊であることはありえない。第二章を中心にしたころでは、仏伝に変更を加えることによって、つまり新しい仏伝に書換えることによって釈尊が解釈されている。簡単にまとめると次のようになる。

「釈尊は衆生に安楽をあたえるためにこの世に生れた。そして、仏の悟りを方便をもって説くのである。しかし、衆生は苦の中にうずもれ、偉大な仏を求めようとしめない。釈尊は、そのような衆生に強い慈悲を持つのである。釈尊は悟りの座において、三七日の間「この智慧はすぐれたものであるが、衆生は迷妄である」と考えていた。そのときに、梵天などが説法を要請する。釈尊は、法を説いても衆生はそれを誹謗し悪趣におちいるだけであるから、説法を止めようと考ええる。しかし、過去の仏たちの巧みな方便を思い起し、仏の悟りを三種に分けて説こうと考えなおす。十方の仏たちはそれを賛嘆する。そこで、ヴァーラーナシーに行つて、五比丘に方便をもって法を説くのである。それから長い間、法を説き、涅槃の境地を明らかにしたのであるが、仏の息子たち（彼らは、かつて勝利者たちについて、方便としての法を聞いていた）が世尊に合掌するのを見て、最高の法を説くときがきたと考え、一乗の法を説く」(Ibid., pp. 54-59, II, 3-6) のである。

ここでは、釈尊が真に説きたかったもの（『法華經』が正法とするもの）が、どのようにして説かれてきたかを語るものである。新しいコンテキストでの、「正法を語る」ことにポイントを置いた釈尊像である。

しかし、この釈尊の背後にあるものは、後に久遠の本仏を出現させるものを含んでいるのである。如来の智見と

か、眞の涅槃といわれるものは、説法している仏の永遠なる姿に行着くからである。いずれにしろ、釈尊との出逢いは釈尊の力を受け止めることであるが、単に過去の釈尊との出逢いではないのである。それは、法の解釈を媒介とした釈尊との出逢いだからである。

四、まとめ

仏教の全体を自己に引受け、自己のものとして、その中で生きようという確信はどのようにして生れるのかという問題を、『法華経』の説法の在り方の中でみてきた。それは正法の追求であったが、『法華経』では一乗という原理をみいだしたときに、如来の弟子であるという確信を得、自己を仏教の中へ投げ入れることができたといえる。そこでは、すべての人が仏と成り得ることがその根底にある。

『法華経』が提示した法の受け止め方の根底にあるものは、多様性を受け止めるときの統一性の必要性である。自己を投げ入れるときは、全体をみるというスタンスがなければならぬ。さもなければ、多様性の中に自己を見失うことになる。そうかといって、多様性がおろそかになれば、法そのものもおろそかになり、成仏もありえないだろう。我々は仏教徒として、やはり阿含以来のすべての教理を学ぶ姿勢が必要なのである。

現代においては、我々は『法華経』と異なったコンテクスト（文化的にも、地理的にも）の中にいるのも事実である。葬式など仏教教理だけで済まない問題がある。こうしたことが、現代の絵描きであることをいっそう難しくしている。『法華経』のスタンスを敷衍させると、そうした事柄も含めて全体を見る原理を模索していくことになるであろう。そのときに、仏教が自己の中で確信されると考えるのである。